

日本新民謡運動の隆盛と植民地台湾との文化交渉

— 西条八十作「台湾音頭」をめぐる騒動を例として —

増 田 周 子

The Cultural Interaction between Japan and Taiwan
in the Colonial Period: The New-Minryo Movement
and the Record “Taiwan-Ondo” by Victor K.K.

MASUDA Chikako

The New-Minryo Movement that was centered on the creations of such songwriters as Ujo Noguchi, Yaso Saijo, Hakushu Kitahara, and Shimpei Nakayama, rapidly expanded throughout Japan from the end of the Taisho Period and into the Showa Period with various hit songs like “Habu no Minato” and “Tokyo-Ondo”. A new minryo folk song boom also emerged in colonial Taiwan, and many songs were written in there as well. However, due to an overly aggressive strategy and the commercialism of the recording labels, problems of plagiarism also surfaced, such as with Yaso Saijo’s “Taiwan-Ondo”, an issue that was examined by “Wakakusa”, a folk song and ballad magazine in Taiwan. Though this negative side did exist, it is still possible to touch upon a portion of the cultural interaction in East Asia by looking at the international expansion of the New-Minryo Movement.

キーワード：西条八十，新民謡運動，「台湾音頭」，台湾，レコード

はじめに

江戸時代の永きにわたる鎖国を終えたあとに成立した日本近代文学を論じるうえで、諸外国の文化状況を無視することはできない。しかし、外国を視野に入れて日本近代文学を論じることは、日本国内ではこれまで余り試みられてはこなかった。近年、アジアだけを例にとると『作家のアジア体験』¹⁾、『中野重治と朝鮮』²⁾、『言語都市・上海』³⁾、『魔都上海』⁴⁾、『交争する中国文学と日本文学 — 淪陷下北京1937

1) 芦屋信和・上田博・木村一信編『作家のアジア体験』（1992年7月30日，世界思想社）。

2) 鄭勝云著『中野重治と朝鮮』（2002年11月15日，新幹社）。

3) 和田博文・大橋毅彦・真銅正宏・竹松良明・和田桂子著『言語都市・上海』（2002年11月15日，藤原書店）。

4) 劉建輝著『魔都上海 日本知識人の「近代」体験』（1999年9月30日，講談社選書メチエ）。

-45』⁵⁾などの本が刊行され、徐々に日本文学の研究者達もアジアに目を向け、グローバルな視野で日本近代文学をとらえるようになってきた。しかし、膨大な作家や知識人がいる日本近代文学には、諸外国との関連の中でもまだまだ残された課題が山積みされているのが現状である。台湾と日本文学では、島田謹二『華麗島文学史 — 日本詩人の台湾体験 — 』⁶⁾、中島利郎編・著『日本統治期台湾文学小事典』⁷⁾、垂水千恵『台湾の日本語文学』⁸⁾、中島利郎・河原功・下村作次郎監修・編『日本統治期台湾文学集成』⁹⁾などの本が刊行され、研究しやすくなってきた。今後益々、台湾での日台関連文学研究は充実していくであろう。

さて、本稿では、日本近代文学の一作家、西条八十の「台湾音頭」（1934年9月 ビクター）をとりあげ、日本ではじまった新民謡運動の植民地への広がりによってどのような文化交渉がおこったのか、台湾を例に考察していきたい。新民謡運動とは、古来からあった民謡とは区別し、本格的には大正末から昭和にかけて、北原白秋、野口雨情、西条八十らによって手掛けられた、創作民謡制作運動を指す。¹⁰⁾新民謡運動は昭和初期の一時時代に全盛期を迎え、作曲家、舞踊家とのコンビで普及し、鉄道網の充実、ラジオ、蓄音器、レコードなどの電波によって、日本だけでなく、植民地へも広がっていったのであった。¹¹⁾

西条八十は、広く知られた作家であり、西条八十先行研究は現在までかなり存在する。¹²⁾しかし、本稿でとりあげる西条八十作「台湾音頭」に関する論文は一編も存在しない。本稿では、日本でおこった新民謡運動が、植民地台湾にも広がりを見せ、文化的な交流や摩擦を引き起こしていった諸相を、西条八十作「台湾音頭」を例にとって考察していきたいと思う。

一 日本の新民謡運動の状況

1 童謡運動から新民謡運動へ

1934年7月に創刊された『赤い鳥』¹³⁾は、鈴木三重吉が「世間の小さな人たちのために、芸術として真価のある純麗な童話と童謡を創作する最初の運動を起こしたいと思ひまして、月刊雑誌『赤い鳥』を

5) 杉野要吉編著『交争する中国文学と日本文学 — 淪陥下北京1937-45』(2000年6月15日、三元社)。

6) 『華麗島文学史 — 日本詩人の台湾体験 — 』(1995年6月20日、明治書院)。

7) 『日本統治期台湾文学小事典』(2005年6月15日、緑蔭書房)。

8) 『台湾の日本語文学』(1995年1月24日、五柳書院)。

9) 『日本統治期台湾文学集成』(2002年～2003年、緑蔭書房)。

10) 「新民謡運動の先駆」(古茂田信男『雨情と新民謡運動』1989年11月25日、ふるさと文庫)2～9頁に、「新民謡運動は始め詩運動として展開されたのであるが、やがて詩人・音楽家の提携によって新しい歌曲歌謡運動へと発展し、いわゆる新民謡(創作民謡)全盛時代を現出したのである」とある。

11) 『日本民謡協会史』(1980年6月19日、日本民謡協会)50～55頁。

12) 「国文学論文目録データベース」(国文学研究資料館編、2008年3月現在)では、西条八十研究で60編の論文がある。また、「MAGAZIN-PLUS」(日外アソシエーツ編データベース、2008年3月現在)では、74編の論文がある。

13) 鈴木三重吉主宰の児童雑誌。前期1918年7月～1929年3月まで127冊、後期1931年1月～1936年10月まで196冊を発刊した。

主宰発行することにしました」¹⁴⁾と述べるように、童謡運動を引っ張っていった雑誌として著名である。西条八十も、『赤い鳥』（1918年9月号）に「忘れた薔薇」¹⁵⁾、1918年11月号に「かなりあ」¹⁶⁾を掲載し、積極的に童謡運動に関係していく。「かなりあ」は、1919年成田為三の作曲で発表されると、「わが国最初の芸術童謡として津々浦々にうたわれた」¹⁷⁾という。

童謡運動は、文部省唱歌の教訓的で固苦しい作詞の方針に反発して、「自由と解放」の精神をモットーに、進展していった。¹⁸⁾この運動に参加していったのは、西条八十の他、北原白秋、三木露風、野口雨情、作曲家では山田耕筰、成田為三、近衛秀磨らであった。童謡運動がおこる以前から、1910年に日本初めてのレコード会社日本蓄音器商会（ニッポノフォン）が出来、大正初期にかけて、八木節、磯節、木曾節など数多くの地方民謡がレコード化されていった。創作を中心とした童謡運動の発展は民謡運動の発展を促した。民謡をただ発掘して収集するだけでなく自由な精神を謳歌した創作民謡がつくられていく。いわゆる新民謡運動である。また、1918年頃、東京音楽学校で教鞭をとっていた本居長世の家に集まった中山晋平、野口雨情、宮城道雄らによって新音楽運動もおこっていく。1919年には、民間開発基金の募集のため、女子音楽大学で民謡講演、演奏会が催され、民謡と音楽が融合し、新民謡運動の発端となった。¹⁹⁾そんな中、西条八十は、1923年、関東大震災の時、罹災者が不安に苛まれながら避難している中で「一人の少年がハーモニカを吹いていた。その単純なメロディーが人々の心を慰撫したらしく、そのメロディーを求めて三々五々人々が集まり、やがて大きな人垣となった。八十は後年、歌謡を書く動機の一つはここにあった」²⁰⁾と言うが、関東大震災を境として次々と創作歌謡を書き進めていくのであった。²¹⁾

西条八十は『大衆民謡のつくり方』の中で次の如くに述べている。

「めでた、めでたの若松さまよ枝も栄えりや葉も繁る」といふ歌詞で、これはほとんど日本全国の、どこの郷土民謡の中にもはいつてゐる。こんな工合に、嘗ては、その郷土の風景情趣の特色をうたつた民謡の歌詞も、（ここでは曲については述べない）現在ではほとんど日本全国みんな混り合つてしまつた。民謡が、その郷土の特色を表現しなくなつた。そこで、新しい民謡の歌詞をつくる機

14) 福田清人「『赤い鳥』総論」（『『赤い鳥』復刻版解説・執筆者索引』1969年2月10日、日本近代文学館、4頁）によると、鈴木三重吉が配布した「童話と童謡を創作する最初の文学的運動」という印刷物に記された言葉にこのようにある。

15) 『赤い鳥』第1巻3号（1918年9月1日）40～41頁。

16) 『赤い鳥』第1巻5号（1918年11月1日）58～59頁。

17) 『西条八十著作目録・年譜』（1972年6月1日、西条八束発行・中央公論事業出版制作）386頁。

18) 大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典第2巻』（1993年10月31日、大日本図書株式会社）の藤田圭雄「童謡」444頁に「『芸術家の目から見ると、実に低級な、愚な、現在の子どもが歌つてゐる唱歌』にあきたらず、新しい童謡運動として起こったのが、一八年創刊の『赤い鳥』による白秋・八十を中心とした運動である」とある。

19) 『日本民謡協会史』54頁。

20) 『西条八十著作目録・年譜』（前出）392頁。

21) 「著作目録（歌謡）」（『西条八十著作目録・年譜』215～337頁）によると、関東大震災以前にも歌謡は二つあるが、関東大震災後には一気に増えていく。

運が生れ出たわけだと、わたしは思ふ。この新しい郷土民謡の製作に率先して着手した詩人は、野口雨情氏と北原白秋氏で、その次がわたしであつた。わたしとしては昭和六年頃から、同十年頃へかけてがいちばん各地を旅行しつつ、製作した時代だつた。²²⁾

西条八十、北原白秋、野口雨情は、各地を旅しながら多くの創作民謡を作成して行くのである。西条八十は、「昭和五年の夏、六月二十八日から約一ヶ月間、私は大阪朝日新聞の依頼で、画家古家新氏と共に、ひろく西日本にわたる民謡行脚を試みた」²³⁾という。また、野口雨情は、後年コロムビアとなるニッポノフオンの森垣二郎氏と民謡探索の旅に出て、野口雨情を主幹とした『民謡音楽』（民謡音楽発行所）という雑誌を発刊したりする。²⁴⁾ ちなみに、民謡音楽発行所は、コロムビア出版社内にあった。新民謡運動は、創作民謡が中心であったため、白鳥省吾らに次のように批判される。白鳥省吾は、「新しき民謡について」で、

童謡が盛んになり民謡の価値が認められるやうになつてから、たしかに一般の人は詩といふものに親しみをもち、解し易く作り易きものといふ考を持つやうになつた。しかし詩人の或者はそれに倅さしてぞんざいな素画風な詩を民謡と呼び童謡と称して作製しては居ないか。その例證はなかなか多い。(中略) 現代の新しい民謡がどういふものであるかを見るために、その選手として北原白秋、野口雨情の二氏の作を見やう。総括して言へば二人ともに、日本の伝統といふものを狭小な固形したものに考へて居り、著しく自己逸樂的で社会性に乏しい。民謡の本質には、その一半に愛慾に殉ずる情緒があると共に、一半に社会的な怨嗟反抗歎息があるものである。そこに個人的な趣味でなしに協同の唄があるのである。然るにこの二人の民謡には消極的な意味に於ける日本情調、淡い哀愁とか言ふものは流れてゐるが、一般の生彩ある社会生活とはよほど縁遠いものとなつてゐる。さういふ消極的な傾向は新旧いづれの民謡にも属せざるものである。

北原白秋氏のものでいま手近にある『民謡百草』（中央公論新年号所載）を見ると、驚くべきことにはその中に民謡らしいもの（詩らしいもの）は幾篇もない。民謡と詩との分類は如何やうにもあれ、凡てを通じてあまりに作りものが多い。²⁵⁾

と述べた。白鳥省吾は、北原白秋の民謡はブルジョア的で享樂趣味的で「作りもの」とであると批判する。続けて、「白秋、雨情の二氏のごとき優れた才能のある詩人が、幾らか思想的に自覚し、その民謡が社会性を帯びて来たら、もつと生彩ある面白いものが出来やうかと思ふ」（注25の90頁）と新民謡に社会性を求め、北原白秋と論争をまきおこす。²⁶⁾ 一方、西条八十は「私が民謡を書く気持」で次のように述べる。

22) 西条八十『大衆民謡のつくり方』（1947年11月5日、全音楽譜出版社）（『西条八十全集第14巻』1993年7月30日、国書刊行会、243頁）。

23) 『民謡の旅』（1930年10月20日、朝日新聞社）「序」（『西条八十全集第14巻』255頁）。

24) 『民謡音楽』は、1929年4月創刊。

25) 白鳥省吾「新しき民謡について」（『日本詩人』1922年10月1日、2巻10号、83頁）。

26) 1922年『詩と音楽』『日本詩人』誌上で、北原白秋と白鳥省吾の間で民謡をめぐる争い広げられたもの。安智史「民

人によつては、「或る土地の民謡などといふものは、永年その土地に親んだその土地の人が書くべきで、一介の旅行者たる職業的詩人などが書くべきでない」といふ意見を吐く人がある。しかし、わたしはその反対にかういう気持ちでその製作を引きうける。

なるほどこの議論にも一理はあらう。併し、第一に、たとえさうだとしても、それだけの才能のある詩人が各土地に居るか？これが問題である。次に、永くその土地に住んだ人に、果してわたしよりもよりよく、その土地の風景情趣が捉へまた詠へるか、これが疑問である。よく、人間の批判は、第一印象にあると言ふではないか。なまじ、永くその地域にゐて、習慣的にその風景を見るにも人情に接するのにも馴れ切つて、認識が麻痺した人よりも、却て、飄然とやつて来た一旅客の詩人のほうが、よく澁刺と敏感に、その土地の面目を掴めるのではないか。

わたしはかうした自負で、敢て仕事をする。²⁷⁾

西条八十は、一流の詩人として自信を持ち、積極的に地方土地を訪れ、北原白秋や野口雨情らと共に、その土地を知らない立場でありながら、新しい創作民謡を作り出し、新民謡運動を実践していくのであった。

2 ラジオの普及と新民謡運動の定着と「音頭時代」の到来へ

新民謡運動や地方民謡は、1925年のラジオ放送の出現で、急速に広がっていった。「ラジオ放送開始以来、ラジオの普及は速く、僅か一ヶ年間で聴衆者は10万に達したといわれ、昭和元年は39万4千、昭和3年は50万を突破、昭和7年は百万を超えるという普及ぶりであった。したがってラジオ放送による民謡の普及は、一段と大型化し」²⁸⁾ていく。そして、1928年2月には、ついに藤沢衛彦方に、日本民謡の蒐集研究と新しい民謡作詩、作曲の目的で、詩人、音楽家、研究家を一団とする団体、日本民謡協会が設立する。そして、1928年10月2日、日比谷新音楽堂で日本民謡協会が主体となり、東京市主催形式の第一回民謡祭が開催された。詩人と音楽家が新民謡を披露し、舞踊家達が踊りを踊るというものであったが、以後、毎年東京市の年中行事として続いたという。²⁹⁾牛山充は、「輝く新民謡の将来」としてこの民謡祭や新民謡のことを次のように記している。

民謡協会の年中行事の一つとして毎年日比谷の音楽堂で行う事になつた民謡祭は、新民謡の作家と之に作曲し、之に按舞する作曲家及び按舞家の創作的労作に良き刺激を与へ、一層の努力と精進とに導くと同時に、一般民衆を新民謡の影響圏内に誘致し、之に対するより深き理解を与へ、此理解を通じて更に彼等を新民謡に対する愛に迄到達せしめようとしてゐる。

謡・民衆・家庭 ― 白鳥省吾と北原白秋の論争をめぐる ―」（勝原晴希編『「日本詩人」と大正詩〈口語共同体〉の誕生』2006年7月21日、森話社、65～94頁）でこの論争について取り上げているが「なお慎重な検証を今後の課題とせざるを得ない」とある。この論争は、詩壇を巻き込んだ論議であり、今後も十分な検討が必要である。

27) 『大衆民謡のつくり方』（『西条八十全集第14巻』、前出、245頁）。

28) 『日本民謡協会史』（前出）51頁。

29) 『日本民謡協会史』54頁および「日本民謡協会」（古茂田信男『雨情と新民謡運動』、前出、72頁）参照。

一面に於ては郷土民謡及び之に伴ふ郷土舞踊の都会的進出が次々に試みられ、都会人の好尚の節にかゝつて洗練、若しくは多少の変改を受け、再び地方に帰り、或は全国的に伝播されつゝあるのであるが、一二の例外を除き、全体から見て其盛行は到底新民謡系統のものには及ばないやうである。(中略)

新民謡は其格調に於て全く旧系統の民謡の型を破り、其の内容に於ても極めて大なる多様性と複雑性を示すものである。従つて之に与えられる作曲、及び其按舞も、作曲家及び按舞家に十分創造的天才を發揮させる自由の天地を有つてゐる。既に現はれたものに就いて考へて見ても将来の躍進と発展の如何に素張らしいものであるかは十分に想望し、期待することが出来る。³⁰⁾

古来からある民謡と比較しながら、新民謡運動の隆盛と発展を期待しているのがわかる。そして、レコード会社は新民謡運動の発展に注目し、新民謡レコードを製作していった。

コロムビアレコードでは、1932年に、国立公園観光地の新民謡シリーズレコードを発売し、ビクターも新民謡曲による全国代表民謡シリーズを製作した。³¹⁾新民謡運動については、服部嘉香も「民謡の将来 — その外、時評二三 — 」として次の如くに述べている。

昔は、民謡が自然に生まれてゐた。今は、民謡を意識して作る。そこに巧拙もあるし、ほんもの、にせもの、別もある。さうして、だいたいには、生まれた民謡は、拙いところはあつてもほんものであり、作られた民謡は、巧みであつても、にせものが多い — といふ風に考へられてゐる。

けれども、今日は、生まれる民謡を期待することは殆ど不可能といつてよい。巧拙、真偽はいろいろであらうが、民衆の中から生まれるのではなくて、或一人が、その民衆、多数を代表して作ったものがわれわれの耳目を楽しませるのである。随つて、今後は、生み出す母胎であるところの郷土性よりも、作る人の個性味に豊かな興味がつながれることであろう。³²⁾

このように、新民謡運動は「郷土性よりも、作る人の個性」に従つて、進んでいくのである。1922年には、「須坂小唄」(長野県)(詩・野口雨情 曲・中山晋平)、1924年、「三朝小唄」(鳥取県)(詩・野口雨情 曲・中山晋平)、1927年、「ちやっさり節」(静岡県)(詩・北原白秋 曲・町田佳声^{ママ})、1929年、「さつても節」(十日町小唄・新潟県)(詩・永井白眉 曲・中山晋平)、「上州小唄」(群馬県)(詩・野口雨情 曲・中山晋平)、1930年、「祇園小唄」(京都府)(詩・長田幹彦 曲・佐々紅華)、「草津小唄」(群馬県)(詩・相馬御風 曲・中山晋平)、1931年、「飯坂小唄」(福島県)(詩・西条八十 曲・中山晋平)、1933年、「磯原節」(茨城県)(詩・野口雨情 曲・藤井清水)、「天竜下れば」(長野県)(詩・長田幹彦 曲・中山晋平)と数多くの新民謡が作られたのであった。³³⁾注目すべきは、1928年に作られた、野口雨

30) 牛山充「輝く新民謡の将来」(『民謡音楽』1930年1月1日、174～175頁)。

31) 『日本民謡協会』(前出)56頁。

32) 服部嘉香「民謡の将来 — その外、時評二三 — 」(『民謡音楽』1930年4月1日、14頁)。

33) 『日本民謡協会史』(前出)57頁参照。

情作詩，中山晋平作曲の「波浮の港」である。これは，大島を歌った民謡である。日本ビクターから佐藤千夜子によってうたわれ，レコード発売され，大ヒットする。それ以前の流行歌として，1916，1917年頃の「カチューシャの唄」（詩・相馬御風 島村抱月 曲・中山晋平）や，1921年の「船頭小唄」（詩・野口雨情 曲・中山晋平），1927年の「出船」（詩・勝田香月 曲・中山晋平）などがあるが，「レコードを媒介とする流行歌の伝播は，まさに工場制生産そのものである」³⁴⁾という。また，1928年には，宝塚少女歌劇の劇中歌として使われた「モン・パリ」（詩・岸田辰弥 曲・ヴンセント・スコット）もビクターから発売されて大流行した。「アラビアの唄」（詩・堀内敬三 曲・フィッシャー）や1929年の「君恋し」（詩・時雨音羽 曲・佐々紅華）などのジャズ調の流行歌も流行って行くが，1929年，映画「東京行進曲」の主題歌「東京行進曲」（詩・西条八十 曲・中山晋平）は，20数万枚を売り上げる大ヒット曲となった。³⁵⁾「この曲は中山氏が，ジャズ気分で大衆の気持ちが変わって来たといふやうなことに目をつけて，日本調のジャズ風にし，しかも明るみを付けたのであります。これが旨く当つたわけであります。」³⁶⁾と言う。その後，「島の娘」（詩・長田幹彦 曲・佐々木俊一）や1933年「東京音頭」（詩・西条八十 曲・中山晋平）がつくられる。『島の娘』のレコードは今日までに約五十万枚位出てをります，五十万の域に達したレコードは『島の娘』，『東京音頭』，『さくら音頭』位だらうと思ひます」³⁷⁾という。また，続けて

中山晋平氏と西条八十氏に頼んで「丸の内音頭」といふものを作り，その年の夏に，日比谷公園で踊つたのであります。ところが大した効果はなかつたのであります。その翌年に，どうも丸の内といふからキツと流行らないのだらう，詰り，新宿の人は，丸の内へ行かれない方がよい，又浅草の人は丸の内が好きでないに違ひない，だから「東京音頭」と改題し，歌も亦どこで歌つてもよいやうな，つまり家庭で歌はうが，どこで歌はうが，差支へない忠君愛國といふやうなことを歌ひ込んで作り直さうではないかといふ相談が出来まして，出来上がったのが「東京音頭」であります。これが大変受けて，所謂音頭時代といふものが出来たのであります。³⁸⁾

新民謡運動の隆盛に伴い，民謡から流行歌としての音頭へと，発展していくのであった。

「音頭時代」の到来を受けて，西条八十は，様々な音頭を作り出す。例えば，昭和1933年11月には「撫順音頭」，12月には「福井音頭」，1934年1月には「日本音頭」，3月「松原音頭」，4月「巴里音頭」，「いろは音頭」，「長崎音頭」，「四日市音頭」，5月「日満音頭」「黒船音頭」，「あやめ音頭」，6月「伊賀上野音頭」，「納涼音頭」，7月「黒船音頭」，「銀座音頭」，「大漁音頭」，「別府音頭」，「新宿音頭」，9月「北海道音頭」，「東北音頭」，「東海音頭」，「中国音頭（おらが中国）」，「九州音頭」，「台湾音頭」などである。特に1934年はかなりの数の音頭を製作していた。1935年終わり頃から徐々に音頭製作が減っていく。西

34) 長尾直『流行歌のイデオロギー』（1974年4月1日，世界思想社，31頁）。

35) 同書，80頁。

36) 岡庄五『最近に於けるレコード会の趨勢』（1936年9月4日，日本文化協会出版部，35～36頁）。

37) 同書，40～41頁。

38) 同書，42～43頁。

条八十にとっては1934年が音頭製作のピークであったのだろう³⁹⁾。

三 日本新民謡運動と台湾

1 台湾の俚謡雑誌『わかくさ』と日本新民謡運動との関連

さて、「台湾音頭」に関して、興味深いことを見つけたので報告してみたい。その前に西条八十「台湾音頭」と関連のある台湾の俚謡雑誌について紹介したい。

新民謡運動は、植民地へも広がりを見せ、台湾にも影響を及ぼした。台湾の俚謡雑誌『わかくさ』を例にとってみる。この雑誌は、台北市で発刊され、台湾在住の日本人を中心とした雑誌となっていて、全て日本語で書かれている。『わかくさ』は平仮名で『わかくさ 俚謡と民謡』(第181号)⁴⁰⁾、『わかくさ 俚謡・民謡・童謡』(第186号)⁴¹⁾と記したり、『わか草 俚謡研究誌』(第194号)⁴²⁾『若草』(第169号)⁴³⁾、『わかくさ 俚謡研究誌』(第197号)⁴⁴⁾と様々な表記が用いられている。かなり興味深い俚謡誌であり、この雑誌の出版について調査すべきであろうが、現在まだ全貌を調査、整理中なので別項に委ねることとしたい。⁴⁵⁾今回は、1935年10月発行の『わか草』(第200号)の吉田真琴「薫る若草二百号積んで」⁴⁶⁾を踏まえ、簡単に記すにとどめておく。『わかくさ』創刊号は、1917年1月で、謄写版刷りのものであった。1918年の1月号から、活版印刷の雑誌・菊版半載となった。1921年1月から四六判となる。表紙は、第1号から、第3巻12号までが、若草の間から早蕨が一、二本出ている黒の一色刷であった。また、第4巻1号から11号まで、若草の図で、黒の一色刷。第5巻1号から11号までは、左は青、右は緑、緑の方に青で若草の図である。第6巻1号から第81号まで、若草を図案化し、三角形の中に、西洋草花をおさめ、帯の如く泳げる魚を描いた模様。第82号から第92号までは、緑に白百合を表した図である。第93号から、第111号は川辺にて柳に舞う女の図。第112号から第125号は、藝者の化粧姿。第126号から第147号は、紫軒子の筆になる胡蝶蘭。第148号から台湾日々新報社の時事写真版を使っている。第182号から、民謡・童謡欄を開設、第184号から俚謡・民謡・童謡と表紙サブタイトルがついている。1935年10月、第200号で19年間続くことになる。以上が簡単な『わかくさ』の経緯である。

1934年7月2日に訪台した北原白秋を、『わかくさ』主催で、歓迎会を行ったり、第196号、第197号に北原白秋の「民謡私論」を再掲する(『日本の笛』に掲載)など積極的に新民謡運動の先導者を紹介したり歓迎したりしている。つまり、日本の新民謡運動の影響が如実に伺われるのである。ちなみに、

39)「著作目録(歌謡)」(『西条八十著作目録・年譜』、前出、234～239頁)を見ると、1934年に最も音頭制作が多いの
がわかる。

40)『わかくさ 俚謡と民謡』3月号。奥付の書き方が悪く、発行年日不明。

41)『わかくさ 俚謡・民謡・童謡』8月号。奥付の書き方が悪く、発行年日不明。

42)『わか草 俚謡研究誌』4月号。奥付の書き方が悪く、発行年日不明。

43)『若草』3月号。奥付の書き方が悪く、発行年日不明。

44)『わかくさ 俚謡研究誌』7月号。奥付の書き方が悪く、発行年日不明。

45)台湾国家図書館小分館所蔵のものは全て閲覧した。しかし、全て所蔵しておらず、現在、探索中である。所蔵先、
及び個人所蔵があれば御教示頂きたい。

46)吉田真琴「薫る若草二百号積んで」(『わか草』1935年10月、13～20頁)。

北原白秋の歓迎会の案内については、『わかくさ』（第184号）の記述によると、次のようにある。

北原白秋先生歓迎会

斯界の泰斗北原白秋先生が今月中旬御渡台を機会に本会が歓迎会を開催し先生の声歎に接する事に致しましたから会員並に同好者の御出席を願ひます。

場 所 台北市川端町 紀州庵
日時 六月十九日 午後七時開会，九時開演
会費 金三円 当日持参ノコト
申込期日 六月十七日限り
及場所 若草会

発起人 若草会
港 会⁴⁷⁾

北原白秋が台湾に到着したのは、1934年7月2日である（注50 参照）ので、6月に歓迎会を予定していたとは、かなり予定より白秋の到着は遅れたのであろう。また、『わかくさ』（第185号）⁴⁸⁾には次の如くに記している。

北原白秋先生歓迎会

斯界の泰斗北原白秋先生が先月中頃御渡台する予定が変更されて七月一日御到着致しましたが御多忙の為め歓迎会も延期されましたが先生の御了解も得て最も野趣的に若草独特な歓迎会を開催する事になりましたから会員諸子の御出席を希望致します。

場 所 台北市川端町紀州庵
日時 七月二十三日 午後七時開会
持ち寄り題 「北，原，白，秋」随意結び一人五句吐
選者 北原白秋先生
申込期日 七月二十二日限り
会費 金三円当日持参のこと

若草会⁴⁹⁾

白秋が7月1日に到着というのは、『台湾日日新報』（1934年7月3日，7面）の新聞記事を見ると誤りである。7月2日に到着したのだが、歌の選者をしてもらうなど、北原白秋の『わかくさ』への関与の大きさが伺われる。

47) 『わかくさ 俚謡・民謡・童謡』6月号，44頁。奥付の書き方が悪く，発行年日不明。

48) 『わかくさ 俚謡・民謡・童謡』7月号，9頁。奥付の書き方が悪く，発行年日不明。

49) 同書9頁。

北原白秋の訪台については、『台湾日日新報』に「台湾の熱帯風景に期待を持って来た北原白秋氏が語る 三宅中将陸軍運輸部長も来台」と題して記されている。白秋は、「蓬莱丸」に乗っていたらしく、「三百三十六名」の船客であった。記事には、「北原白秋氏談」として次の如くにある。

台湾には今までにも来たい来たいと思つてはゐても遂機会がなかつたがこの度同郷の安武文教局長に呼ばれてたうとう目的を達したと云ふ訳だ、日程は往復ともで、一ヶ月台湾には二十日滞在して各方面を見せて戴きます（中略）ゆつくり見てゐないから初印象はまだ何とも云へないよまああとでゆつくり詩なり歌なり又は句なりお目にかける事になるだらうからここではかんべんしてくれ給へ、現在日本の民謡なり小唄なりがレコードによつて流行を左右されてゐると云ふ事は全くなげかはしい事だ、作家作詞家又は歌手とレコード会社の間には一口には云へぬ複雑な関係があつて中には随分いかかはしいものがある。文藝的価値は皆無だ、併し民謡は既にあき、レコード会社も行き詰まつてゐる⁵⁰⁾

白秋が指摘するように、1934年当時の、レコード会社の儲け主義からくる行き詰まりが、引き起こしたのであろうか。次節では、西条八十「台湾音頭」の剽窃騒ぎについて記してみる。

2 西条八十「台湾音頭」の剽窃騒動

『わかくさ 俚謡・民謡・童謡』（第187号）に、西条八十作「台湾音頭」の剽窃騒動について記されているので、少し長いが、全文を引用してみる。

西条八十に対する世論

前号⁵¹⁾に大略記載した西条八十氏の民謡剽窃に対して当台北の世論可成沸騰して、八月二十四日発行の南日本新報並に台湾経済タイムスが左の如き所論を掲載した。

本誌主幹小松松濤氏も本月十三日無事踏台されたのでいよいよ具体的対策に就いて協議し今後の方針を決する事になった。

民謡「台湾音頭」の剽窃問題起る

台湾若草会同人苦心の作品

50) 『台湾日日新報』1934年7月3日、7面。

51) 『わかくさ 俚謡・民謡・童謡』（第186号8月号、発行年日不明）の23頁に「西条八十氏は詩人 剽窃家？」というタイトルでこの問題を取りあげ、「之までのいきさつを見て当然剽窃であると断言し得る。日本の詩人として亦大家としての氏が破廉恥、不徳義極まる剽窃歌を堂々と発表した蛮勇に驚かざるを得ない。立派な著作権侵害だ。一步譲つて偶然の一致だとしたら氏の詩囊が余りに貧弱で詩人としての価値が認められない。吾々が何も声を大にして氏を非難したくない。か然しインチキの行為に対しては最後まで挑戦する。名もなき吾々であるが氏の踏石ではない。歌詞が欲しければ無料で提供する。が無断でしかも拙劣な焼直しされた上剽窃されたのでは黙つて居られない。而も相手が無名の氏なら問題外だが天下の詩人としての西条氏なら人も我もゆるして居る大家だから黙認する訳にはゆかない。一言あつて然るべしであると思ふ。氏の明答を俟つて今後の対策を考究する意りである」とある。

西条八十の名でビクターから売出さる

蓄音機会社としてコロムビアと列び称せらるゝ日本ビクター民謡作家として（北原白秋と共に現代の第一人者とされてゐる西条八十が、インチキ、剽窃呼ばはりされる問題が島都文壇の一角から捲き起り紛々たる非難の声を投げかけてゐる。問題は最近ビクターから売り出された西条八十作詩、小唄勝太郎、三島一声吹き込みの「台湾音頭」のレコードを縫つての紛争だ、此の歌詞は全四節を以て成つてゐるがその第二節目の「仰ぎまつれや北白川の、宮は全島の、宮は全島の守り神」の傍線が引かれてある以外その悉くが台湾俚謡界を牛耳つてゐる若草会同人の合作且つ力作の「台北音頭」を無断借用に及んでゐることの一大発見である、右の傍線を引いてある箇所原作は「流れつきせぬ」であり、また「宮は島根」であつて之を生硬且つ語呂の悪い全島とせねばならぬ所にへう窃の苦心が存する、が仮りにも西条とも云はるゝ先生の焼直しとしては、歌詞にもならぬ拙劣チン妙を極めてゐる、若草同人は台湾にも郷土趣味を高揚した音頭を作らうとの発念から、銘々彫心鉦刻の苦吟を練りに練つた結晶であるだけ相当自信があり相手の陋劣な根性とは知らず、同社文藝部に送稿してレコード製作の交渉したところ作品は立派だが音頭の流行が稍下火になつたから暫らく時機を待つてくれとの回答だつた。それが無断で突如一二句を変更され勝手に作家まで拵えて売り出されたのだから憤慨するのは当然だ、日本一の西条八十の作と銘うたれたのは作品の価値を裏書するものとして誇るに足るとはいへ会社の営業か販売政策かは知らぬが他人の作を麗々しく銘うたせて売り出した厚がましさは従来此の手で泣かされた例やありやなしやは知らぬが破廉恥不徳義極まるもので充分糺弾の価値あり、こんなインチキで日本の国粹宣伝など臍茶が湧くと云ふものだ。

（南日本記事再録）

盗作音頭

西条八十対わかくさ

何も中央文壇の、大家が創作の剽窃をすると云ふ事が今初つた事ではないが、今を時めく小唄、流行唄当代一の作家と謳はれてゐる西条八十が、腕を南へ延ばして終ひにこの台湾で専念正調俚謡の普及發達に精進してゐる「わかくさ」誌に迄喰ひついて来たと云ふのは最近ビクターで売り出した台湾音頭の一部が誰が見ても疑ふ形なき剽窃と見られてゐる、「わかくさ」第百八十一号巻頭にある台北音頭に「流れつきせぬ 北白川の、宮は島根の 守り神」とあるものが、ビクターの台湾音頭には「仰ぎ奉れや 北白川の 宮は全島の守り神」となつて、勝太郎に三島一声が声を絞つてゐるのである仰ぎ奉れやにしろ、全島にしろ、第一西条八十の作とは考へられぬ陋劣な詩句であり、これは営利会社の売名的宣伝商策と見ても、踏みにぢられた様な憤怒を抱かされたのが「わかくさ」同人である、その経緯としてビクター台北出張所主任にこの「台北音頭」吹き込み方を「わかくさ」から持ち込んで間もなく「台湾音頭」が現はれるに及んでは正に「わかくさ」同人のみでなく台湾在住民を喰つた遣り方としてビクター側に今や非難の聲が嵩つてゐる模様である。

（以上タイムス）⁵²⁾

52) 『わかくさ 俚謡・民謡・童謡』9月号、12～13頁。奥付の書き方が悪く、発行年日不明。

これら引用文に書かれた「南日本記事再録」は『南日本新報』を、「タイムス」は『台湾経済タイムス』を指す。『わかくさ 俚謡・民謡・童謡』（第187号）のこれら再録された新聞の記事によると、西条八十作詩として、ビクターから発売された「台湾音頭」は、その一部が『わかくさ 俚謡と民謡』（第181号）同人の詩を無断で借用しているという。いわゆる盗作が疑われるという。これら記事にある1934年3月の『わかくさ 俚謡と民謡』（第181号）を見てみた。『わかくさ 俚謡と民謡』（第181号）2～3頁に、問題の台北音頭が次のように載せてあった。全文を写してみる。

台北音頭（島都小唄）若草会作詞

一、アー歌の台北 明るい所 ホイホイ

島の鎮めの 島の鎮めの ある所 ソレ サンサ サラサラ 椰子の風

二、アー伸びる都の 朝霧分けて ホイホイ

島の文化の 島の文化の 塔が浮く ソレ サンサ サラサラ 椰子の風

三、アーネオンサインの 時雨を縫うて ホイホイ

走る市バスの 走る市バスの 銀ねずみ ソレ サンサ サラサラ 椰子の風

四、アーねんね合^{ねむ}飲の木 三線道路 ホイホイ

肩を並らべりや 肩を並らべりや 花が散る ソレ サンサ サラサラ 椰子の風

五、アー水も静かな 蔓華の柳 ホイホイ

赤い灯が浮く 赤い灯が浮く 唄が浮く ソレ サンサ サラサラ 椰子の風

六、アー流れつきせぬ 北白川の ホイホイ

宮は島根の 宮は島根の 守り神 ソレ サンサ サラサラ 椰子の風

七、アー月もあんまる 円山越えりや ホイホイ

恋し北投の 恋し北投の 湯の煙り ソレ サンサ サラサラ 椰子の風

八、アー薫る茉莉花 大稻^{まつり}理に ホイホイ

茶撰り乙女の 茶撰り乙女の 笠が行く ソレ サンサ サラサラ 椰子の風

九、アー虹が絡らんだ 台北橋を ホイホイ

下る戎克の 下る戎克の 帆が赤い ソレ サンサ サラサラ 椰子の風

十、アー船は南へ 追風を受けて ホイホイ

島の都の 島の都の 唄聞きに ソレ サンサ サラサラ 椰子の風

一方、西条八十作詞 中山晋平作曲、三島一声／小唄勝太郎歌「台湾音頭」（「東京音頭」替歌1934年9月 ビクター）はどのようなものか。全文を載せてみる。⁵³⁾

ハアー

踊れ、^{はや}喋せや チヨイト 台湾音頭（ヨイヨイ）

53) 『西条八十全集 8 巻』（1992年11月20日、株式会社国書刊行会、259頁）からの引用。

島は月夜の、島は月夜の南風（サテ）
ヤットナ ソレ ヨイヨイヨイ
（ヤットナ ソレ ヨイヨイヨイ）

仰ぎまつれや 北白川の
宮は全島の、宮は全島の守り神

山は新高^{にひたか} 日の本一^{ひもと}よ
阿里^あの檜^りは、阿里^{ひのき}の檜は世界一

新茶台北^{たいほく} 名所は台南^{たいなん}
なかの台中^{たいちゅう}は、なかの台中は米の山

あら
濯^{あら}へ、黒潮 祖国の南
守る我等の、守る我等の鉄の腕

確かに、「台北音頭」第六連と、「台湾音頭」の第二連の歌詞が酷似していて、新聞報道によると、「同社文藝部に送稿してレコード製作の交渉したところ作品は立派だが音頭の流行が稍下火になったから暫らく時機を持つてくれとの回答だった。それが無断で突如一二句を変更され勝手に作家まで捲えて売り出された」とあるので、おそらくビクターが作者に無断で「台北音頭」を利用したのであろう。西条八十は巻き込まれてしまったのかもしれない。『わかくさ』掲載の新聞、1934年8月24日の『南日本新報』と『台湾経済タイムス』を実際にさがしてみた。『南日本新報』は、台湾大学に1932年4月から1938年10月まで所蔵されていたが、該当の、1934年8月の新聞は存在するのに、8月24日の新聞だけがなかった。国会図書館にも所蔵されているが、台湾大学のマイクロフィルムのコピーであった。『台湾経済タイムス』は、一部は残っているのだが、該当の昭和1934年8月は、台湾のNACSIS-WEBCATにあたるサイトで調べてみたが、公共図書館には所蔵されていなかった。そこで、残念ながら、両方の新聞共に原物は見ていない。しかし、8月24日の新聞だけが残っていないのは、植民地政策の中で、もしかしたら『南日本新報』に日本側が圧力をかけて、該当箇所が流布しないようにしたのではないかと考えている。西条八十は、1929年にビクターと専属契約を結び、1932年に、ビクター専属のままコロンビアとも一年間専属契約を結ぶ。1933年にはコロンビアとの契約が切れて、ビクター一本となるのだが、1935年9月、ビクター専属からコロンビア専属へと移籍した。理由として「ビクターも決して居にくい会社ではなかったが、唯一つわたしの主張とする作詞人と作曲人との待遇を同一水準とするという要求は最後まで容れてくれなかった。理由は他にも多少あったが、この一事が最後の点でわたしにビクターを訣別させた」⁵⁴⁾ という。西条八十の言う「理由は他にも多少あった」というのが気になる。西条八十

54) 西条八十『唄の自叙伝』（『西条八十全集17巻』2007年3月20日、国書刊行会、143頁）。

は詳細をあかさないが、「台湾音頭」に関する盗作騒ぎのことも関係するかもしれない。日本ビクター文藝部長であった、岡庄五は、『最近に於けるレコード会の趨勢』の中で、1936年のレコード会の情勢について次のように述べている。

然らば此業界は現在どの位の大きさがあるかといふことでありますが、ハッキリ登記済になつてゐる会社は沢山ございませぬ、個人で小さくレコードの製造をやつてゐるところは沢山あります。まづ之等を全て合しますと大体、製造元と申上げてよいのは現在十五、六あります。それからレコード製造協会といふ協会が拵へられて居りますが、これに加盟してゐる会社は現在六つであります。即ちビクター、コロンビア、ポリドール、帝蓄、大日本それに最近加盟致しましたキングであります。そこで大体に於ける現在の投下総資本額とふものは、一千二、三百万円位だらうと思ひます。個人のはなかなか分りませぬが、大体合計してさういふ様なことになると思ひます。(中略) この業界の年産額は約三千万円見当であると思はれるのであります。然しこの数字も確とは申上げ兼ねるのではあります、大体、当らずと雖も遠からずの程度であると存じます。レコードは業界全体で一ヶ月に現在、約二百万枚位プレスして市場に出されてをりますが、その中、百五十万枚位が需要家の方に消化されてゐるだらうと思はれます。でありますから、現在では生産過剰といふ状態になつてをります。⁵⁵⁾

生産過剰になるほど、レコードが生産され続けていた。レコード会社の商売戦略も過ぎたのである。『わかくさ 俚謡・民謡・童謡』(第188号)に、吉鹿優芽二が「雨情氏とその作品を語る」として次のように記している。

私が同氏にお逢ひして、童謡創作の指導を受けてより十八年余、いまだに当時に変らぬ親しさを以つて慈父として交際し、指導して下さる態度は、誰れ人といへども真似の出来る事ではありません。

凡てに地味である点、西条八十ほど流行児になれない処でせうが、北原白秋の明朗さと、雨情氏のこの渋味、渋味は、実に貴いものだと思ひ、常に尊敬して甘えてやまない点であります。⁵⁶⁾

ここで、西条八十、野口雨情、北原白秋のことを出しているが、新民謡運動を推進し三人の作家たちは『わかくさ』同人に多大な影響を与え、心に残っていったのであった。野口雨情は、「台湾には昭和二年(四月)、同十四年(十一月～十二月)の二回足を運んでいる。これら旅行のディテールが明らかになるような資料は残されておらず、今となつては分析解明が困難」⁵⁷⁾ というが、台湾にもたらした新民謡運動の意義は大きかったのであった。

55) 岡庄五『最近に於けるレコード会の趨勢』(前出) 9～10頁。

56) 吉鹿優芽二「雨情氏とその作品を語る」(『わかくさ 俚謡・民謡・童謡』10月号、発行年日不明、3～6頁)。

57) 東道人『野口雨情 詩と民謡の旅』(1995年10月31日、踏青社、2頁)。

おわりに

以上、日本での新民謡運動の担い手の代表者であった、北原白秋、西条八十、野口雨情、中山晋平などは植民地台湾にも新民謡運動ブームを引き起こし、台湾の地で多くの創作歌謡が作られていく。『わかさ』は、創作民謡の代表的雑誌である。しかし、レコード会社の過剰な戦略や商業主義のために、本来の新民謡運動の目的が崩れ、「台湾音頭」に見られるような剽窃問題も引き起こしていった。このように、負の側面もあったが、新民謡運動のグローバルな広がりには台湾の文芸活動にも相互に影響があった。東アジアにおける文化交渉の一端が伺えるのである。

*なお、本稿は台湾の新聞を調査するにあたり、台湾大学の徐興慶先生にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。